

令和元年6月17日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02029

研究課題名(和文) 徐霞客遊記における地の科学思想

研究課題名(英文) The Scientific Thought on Earth of Xu Xiaku.

研究代表者

薄井 俊二 (USUI, Shunji)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：90185009

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明代に著述された「徐霞客遊記」について研究したものである。内容としては、同書のテキスト研究や本文解読といった基礎的研究を行った。また、同書に見られる自然地理学的側面についても検討と考察を加えた。その結果、同書には、水脈のように、山岳も「地脈」をなしているという認識が見られることを確認した。また、明代全体に視野を広げ、「風水書」から「王土性」、そして「徐霞客」へ至るといふ、龍脈説の流れがあることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、明代における、風水書と士人による地理書双方にわたっての「龍脈説」の流れが明らかになった。龍脈説の流れについては、水口拓寿氏による研究があるが、その研究でカバーできていなかったところをつなぐことができた。また、風水書という「占術」と、士人による「科学的な思考」との関連性も確認できた。このことは、占術と科学との関係という、伝統中国文化における大きな課題に対しても、一つの答えを出したといえる。

研究成果の概要(英文)： This study investigated "Xu Xiaku Youji (徐霞客遊記)" written in the Ming Dynasty. As for the contents, this study conducted basic research such as studying the text of the book and deciphering the text. The natural geographical aspects of the book are also discussed. As a result, it was confirmed that the book recognizes that mountains, like water veins, also form "ground vein". This study also extended its views to the whole Ming period, and confirmed that there was the Dragon vein theory that goes from "the book of Feng Shui (風水)" to "Wang Shixing (王土性)" to "Xu Xiaku (徐霞客)".

研究分野：中国思想史

キーワード：徐霞客 徐弘祖 龍脈 王土性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中国文明は、外からの影響を受けつつも、独自の科学思想・科学技術を発達させてきた。英国のJ・ニーダムを嚆矢とする研究により、それらの実情や価値が明らかにされつつあるが、大地というものをどう捉え理解するかという「地の科学思想」の面でいえば、治水水利史の研究を除けば、明らかになっているとは言い難い。これは、「地の科学思想」について、体系化され専著となったものがほとんどなく、膨大な地理的記述の中に散在しているものから読み取らなければならないという困難さが、研究の進展を妨げる要因のひとつとなっているからである。

そうした中、明代は、朱子学や陽明学といった哲学的思弁が深められた一方で、合理主義・実証主義的な知的活動が盛んとなり、中国独自の科学思想・科学技術に関わる優れた研究と著述が輩出した時代でもあった。その中に、地理学史の概説書でも必ず高い評価とともに取り上げられるものとして、徐弘祖(1586~1641)の手になる旅行日記「徐霞客遊記」がある。とりわけ約四年間に及ぶ中国南部から西南部を旅した見聞記録(西南遊記とも言う)は、60万言以上を費やして各地の地形や河川水系などを記述しているが、随所でそれらの形成や変化に関する考察がなされている。従来の旅行記が文学志向のものが多かったのに対し、客観的な立場からの観察者の視点で書き貫かれており、地に関する科学思想の文献としても豊かな内容を持つものとなっている。特に洞窟やカルスト地形については、まとまった記述としては世界最古のものと言える。

そこで本研究では、徐霞客の遊記を対象とし、散見する「地」に関する彼の考察をとりまとめ、具体的な地形などの描写と合わせ検討することを通して、彼の「地の科学思想」を明らかにすることを目的とする。地の科学といっても、地形や水系といった自然地理学的側面の他に、人間の営みに関わる人文地理学的側面もある。その両者を扱う。なお徐霞客遊記は、中国で多くの刊行物がだされているにも関わらず、きちんと読み込んだものは少なく、日本においてもほとんど研究されてこなかった。そこで、内容の研究と並行して、研究史の整理や訳注作りなどの基礎的研究が欠かせない。

2. 研究の目的

本研究は、中国明代に著された「徐霞客遊記」について、そこに見られる「地の科学思想」を明らかにすることを目的とする。地形や河川の形成やありようといった自然地理学的側面と、人間の営みに関わる人文地理学的側面の両者を取り扱い、あわせて研究史や本文研究などの基礎的な研究も行う。

これらによって、中国独自に発展した「地の科学思想」の一端を明らかにすることができる。また、地理書を思想的な研究の対象とすることの道が開かれることが予想される。

3. 研究の方法

研究体制としては、研究史の整理と本文研究を行う「基礎研究部門」、様々な地形の現状とその形成に関する思想を研究する「自然地理思想部門」、人々の営みに関する思想を研究する「人文地理思想部門」の三部門を立て、五名の研究者が分担して研究にあたる。

一年目は、これまでの研究成果を踏まえつつ、それぞれの課題を探求する。二年目には、それぞれの課題を探求しつつ、まとまりつつあるものから順次学会発表などを行い、外に発信する。三年目は、まとめの期間とし、課題探求を継続しながら、研究成果公刊の準備を行い、順次発信する。

4. 研究成果

本研究は、明代に著述された「徐霞客遊記」について研究したものである。内容としては、同書のテキスト研究や本文解読といった基礎的研究を行った。また、同書に見られる自然地理学的側面についても検討と考察を加えた。その結果、同書には、水脈のように、山岳も「地脈」をなしているという認識が見られることを確認した。また、明代全体に視野を広げ、「風水書」から「王士性」、そして「徐霞客」へ至るといふ、龍脈説の流れがあることを確認した。

本研究により、明代における、風水書と士人による地理書双方にわたっての「龍脈説」の流れが明らかになった。龍脈説の流れについては、水口拓寿氏による研究があるが、その研究でカバーできていなかったところをつなぐことができた。また、風水書という「占術」と、士人による「科学的な思考」との関連性も確認できた。このことは、占術と科学との関係という、伝統中国文化における大きな課題に対しても、一つの答えを出したといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計23件)

1) 薄井俊二「徐霞客遊記の基礎的研究(六)—事類篇・洞(その4)、全行程(その5)滇遊日記、埼玉大学図書館蔵「徐霞客」関連文献目録(1)」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第68巻第1号、285-301頁、2019年。

2) 薄井俊二「明代の地理家王士性について」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第67巻第1号、225-239頁、2018年。

3) 薄井俊二「徐霞客遊記の基礎的研究(五)—事類篇・洞(その3)、全行程(その4)粵西遊日記(その2)・黔遊日記」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第67巻第1号、241-272頁、

2018年。

- 4) 薄井俊二「徐弘祖の地理・地学思想初探—地の「脈」を中心に」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第67巻第2号、307-316頁、2018年。
- 5) 薄井俊二「明代士人の龍脈説—風水説との関わりで—」『東方宗教』査読あり、第131号、48-68頁、2018年。
- 6) 薄井俊二「中国の山岳と宗教見聞記(その8)——徐霞客の足跡を訪ねる：福建省九鯉湖・紫霞洞、貴州」『埼玉大学国語教育論叢』査読なし、第21号、70~89頁、2018年。
- 7) 田村均「幕末期の岩槻木綿買次仲間と行田商人」『行田市郷土博物館研究報告』査読なし、第9号、1~11頁、2018年。
- 8) 薄井俊二「徐霞客遊記の基礎的研究(三) 事類篇・洞(その1)」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第66巻第1号、179-192頁、2017年。
- 9) 薄井俊二「徐霞客遊記のテキストについて」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第66巻第2号、449-472頁、2017年。
- 10) 薄井俊二「徐霞客遊記の基礎的研究(四) 地理情報、事類篇・洞(その2)、全行程(その3)」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第66巻第2号、473-498頁、2017年。
- 11) 薄井俊二「中国の山岳と宗教見聞記(その7) 徐霞客の足跡を訪ねる：広西南部部・雁蕩山・五台山」『埼玉大学国語教育論叢』査読なし、第20号、89~119頁、2017年。
- 12) 飯泉健司「神武東征伝承に物部氏の祖・ニギハヤヒが登場するのはなぜか？」『古代史研究の最前線日本書紀』査読あり、洋泉社、46-55頁、2017年。
- 13) 飯泉健司「『風土記』は在地の伝承か」『古典文学の常識を疑う』査読なし、勉誠出版、46~49頁、2017年。
- 14) 小林聡「北朝・隋唐における南朝系人士についての基礎的考察—理論的な枠組みの提示を中心に—」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第66巻第1号、203~228頁、2017年。
- 15) 田村均「明治後期の双子織と科学染色法」『蕨市立歴史民俗資料館紀要』査読なし、第14号、1~24頁、2017年。
- 16) 田村均「明治中期、入間郡織物業組合の染料試験と染織講習所」『入間市博物館紀要』査読なし、第12号、1~12頁、2017年。
- 17) 坂口三樹「漢文教育の位置と方向」『日本語学』査読なし、第36巻第7号、12~21頁、2017年。
- 18) 薄井俊二「徐霞客遊記訳注稿 散文篇(一) 『湖江紀源』」『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第65巻第2号、199-212頁、2016年。
- 19) 薄井俊二「伝統中国における洞窟認識—明徐霞客「浙遊日記」を中心に—」『ケイピングジャーナル』査読なし、第56号、25頁、2016年。
- 20) 田村均「明治後期の双子織の品質とデザイン—金子家縞見本の時代鑑定をめぐって—」『蕨市立歴史民俗資料館研究紀要』査読なし、第13号、1~12頁、2016年。
- 21) 田村均「お蚕様の明治維新と埼玉県—幕末開港と蚕糸・織物業—」『埼玉の文化財』査読なし、第56号、43~57頁、2016年。
- 22) 田村均「ファッションから見た幕末明治の日本と国際関係」『歴史地理教育』査読なし、第850号、22~31頁、2016年。
- 23) 田村均「幕末・明治前期の蚕種輸出と生糸改良問題—富岡製糸場と北武蔵—」『地方史研究協議会編『北武蔵の地域形成』査読あり、雄山閣、55~84頁、2015年。

〔学会発表〕(計7件)

- 1) 薄井俊二「徐霞客の地理・地学思想初探—地の『脈』を中心に—」九州中国学会平成29年度(第65回)大会、2017年。
- 2) 薄井俊二「明末士人の龍脈説」日本道教学会第68回大会、2017年。
- 3) 田村均「近世の衣料生産と女性」2015年度総合女性史学会・大会報告、2016年。
- 4) 薄井俊二「旅行日記における五臺山—圓仁と徐霞客—」第二屆「五台山信仰」國際學術研討会、2016年。
- 5) 薄井俊二「伝統中国における洞窟認識—明徐霞客「浙遊日記」を中心に—」日本洞窟学会第41回大会、2015年。
- 6) 小林聡「墓誌から見る北朝隋唐における南朝系人士—理論的枠組の構築に向けて—」日中合同中国石刻國際シンポジウム、2015年。
- 7) 小林聡「北朝隋唐における南朝系貴族群のあり方についての基礎的考察」九州史学会2015年度大会、2015年。

〔図書〕(計4件)

- 1) 飯泉健司(共著)中村啓信監修・訳『風土記 下—現代語訳付き—豊後・肥前・逸文』角川文庫、2015年、505頁。
- 2) 飯泉健司『播磨国風土記神話の研究—神と人の文学』おうふう、2017年、426頁。
- 3) 飯泉健司『風土記の方法—文学の知恵』おうふう、2018年、316頁。
- 4) 薄井俊二(共著)『五臺山信仰多文化、跨宗教的性格以及國際性影響力：第二次五臺山研討會論文集(名山大寺書系II)』(釋妙江主編)、新文豊出版股份有限公司、2018年、482~491頁。

〔産業財産権〕

- 出願状況（計0件）
- 取得状況（計0件）

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：飯泉 健司

ローマ字氏名：IIIZUMI, Kenji

所属研究機関名：埼玉大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：70277747

研究分担者氏名：小林 聡

ローマ字氏名：KOBAYASHI, Satoshi

所属研究機関名：埼玉大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：40234819

研究分担者氏名：田村 均

ローマ字氏名：TAMURA, Hitoshi

所属研究機関名：埼玉大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：40201628

研究分担者氏名：坂口 三樹

ローマ字氏名：SAKAGUCHI, Miki

所属研究機関名：文教大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：90279612

(2)研究協力者

・なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。